



不便な図書館も好き

井上 淳

南山大学で学んだ後、私はアメリカ合衆国ワシントン DC にある The Catholic University of America (略して CUA) という学校に留学した。勉強を始めてまず感心したのは、DC エリアの大学がとっている図書館連携システムのすばらしさであった。DC エリアとはワシントン DC とその周辺のメリーランド州とヴァージニア州の近郊地域のことを言い、この地域にはたくさんの大学がある。そのうち比較的大きな 8 つの大学の図書館がコンソーシウム (consortium) を組んでいて、このどれかの大学に所属していさえすれば、どの図書館も自由に利用できるのである。WEB 上のアラディン (Aladin) という名の共通検索エンジンを使って、どの資料がどの大学にあるのかすぐ調べられるし、自分が所属する大学の図書館に書籍を届けてもらうこともできる。これは非常に便利であった。名古屋にもこのようなシステムをいつかぜひ導入していただきたいと願っている。

さて、このような便利なシステムがある一方、私が所属する CUA の図書館自体は、実はあまり便利と言えるものではなかった。1925 年に建設されたこの図書館は、建物の外見といい中の様子といい、かなり古めかしい。貸し出しカウンターや閲覧室などがある本館部分は地上 3 階建てだが、書庫は 6 階構造になっていて、それぞれの階が南部、中央、北部と 3 つの部屋に仕切られ、それぞれの部屋に上下に移動できる細い階段がある。しかし書庫と本館部分を繋ぐ出入り口は数ヶ所しかないため、なかなか書庫から出られずに焦ることもよくあった。書庫の各部屋には本棚が、通路を挟んで左右の壁に櫛状にずらりと並べられていて、そこに書物が詰め込まれていた。その詰め込み方は限界を超えているほどで、棚のスペースがもうないところは、なんと床にまで本が並べられていたのである。本棚と本棚の間は非常に狭く、古本の匂いが濃厚に立ち込めてい



た。蔵書は全部で 150 万冊ほどもあり、書庫だけではとても収容しきれないので、大小多数ある閲覧室にも多量の本が分散して置かれていたのだった。こういう事情もあって、求める文書がなかなか見つからないことにかけては、この図書館は第一級であった。一冊の本を探し出すのに何時間も図書館内を徘徊するというのも稀ではなかったのである。逆にしかし、苦心惨憺の末に目的の文書のみごと見つけた時のヨロコビはひとしおではなく、まるで迷い子をようやく見出した母親のように欣喜雀躍し、感動のあまり目から涙が止め処もなく流れるのであった（これはちょっとウソ）。

このように、まことに能率のわるい、不便極まりない図書館なのであったが、慣れ親しむにつれて、そのラビリンス的な分かり難さがかえって魅力に感じられてくるから不思議である。古く擦り切れた床や壁には過去の研究者たちの精神がしみ込んでいるような気がし、年季がかもし出す独特の風格と味わいがなんとも言えず、私はけっこう気に入っていた。聖トマス・アキナスが『神学大全』の中で次のようなことを言っている。人間は理性的な魂を有し、理性のはたらきによって物事を知る。理性的な知り方とは、可知的な真理を認識すべく、すでに認識された一つの事柄から他の事柄へと進むことである、と。人間は天使とは違って一度に真理を把握することは出来ず、一つのことから他のことへ進むという仕方、次第に真理へ迫っていくというのである。確かにトマスの言うとおり、一つまた一つと文献を調べ尋ねてゆくに連れて、次第に事柄が明らかに見えてくる。図書館は、まさに人間理性のはたらきを具現したようなところである。ところがそれにしてもまあ CUA のこの図書館は、一から他への移行のために、時としてあまりにも多大な時間と労力がかかるのであった。私は初めそれに非常に苛立ちを覚えたのだが、次第に、これもまあ悪くないと思うようになった。スピードが速いことが必ずしも良いこととは限らないであろう。真理把握への道のりはそう易々と行くものではあるまい。あまり焦ると転んで怪我をしたり、道を間違ったりする危険もある。私に与えられた理性にちょうどよい速度で、ゆっくり進もう。一つ一つに時間をかければ、それだけもっと慎重に考えることができるし、理解も深まりそうだ。不便で非能率的な CUA のこの図書館は、だから、真理探究の場としては、実によく出来ていたのかも知れない。

(Jun INOUE : 人文学部助教授)

カトリック教会 随想

上條 光子

学生時代にフランスに行った。当時、プロテスタントだった私はプロテスタントの教会を探したが、ほとんどが閉まっていた入れなかった。それに対してカトリック教会はどこにでもあり、いつでも入れた。教皇様との謁見で私は密かにある願いを込めて教皇の衣に触れた。

それから2年後のイースターの時にカトリックに改宗した。

小学校の時から教会でピアノやオルガンの伴奏をしていた。中学、高校とミッションスクールだったので毎日朝と晩に教室でオルガンを弾いた。大学で初めてカトリックに出会った。次第にカトリック教会に足を運ぶようになるが、ミサの時の聖体拝領が一番辛かった。自分だけがいただけなかったから。混声合唱団にオルガニストとして入部したがすぐにパートリーダーとして卒業まで居座る。ミサ曲を歌う合唱団だったのでミサに与る機会が頻繁にあった。その間、数々の教会を訪ねた。まだパイプオルガンを置いている教会は少なかった。

仏文の論文の対象作家もプロテスタントのジード（大学の卒論）からカトリックのモーリヤック（修士論文）に移ったのも偶然だろうか。あれほど形式的と思っていたカトリックが実はプロテスタントより自由であることに気が付いた。「説教を聴きに行く」プロテスタントから「秘蹟に与る」カトリックに変わった時点で、喜びを感じる日が増えた。私の伴奏態度も変わった。伴奏者に過ぎなかったプロテスタント時代から見れば典礼演出者になりつつあるように思う。ただ弾いているだけで神を讃美するひとりだという自覚に乏しいオルガニストから自ら率先して賛歌をするオルガニストになったのは海外での経験に因ると思われるのでこの点を少し詳しく説明したい。

10年以上ヨーロッパの教会でオルガン奏者を見てきた。彼等はプロとして日曜日のミサは勿論、毎日のミサで朝か夕方弾く。答唱詩編は彼等が弾きながら歌うのが普通（特に朝ミサでは）。神父とオルガニストでミサが成り立っているかと思えるほど彼等の役割は大きい。日本の教会のオルガニストは資格を問われないのでミサのなかでの役割がはっきりしていない。音取りの出来る人ならだれでもやれそうな扱い、或いはその程度の理解しか存在意義を見出せない現状に嘆きたくなる教会もある。

ミサに与る人数が少ないからオルガンはいいですよと言う神父もいる。歌うのに。音は五度以上低く歌い出す人がいるとそれに従い、テンポもばらばら。賛歌ではない。（この6月の東京の或る教会の朝ミサでのごとく25人以上いたにもかかわらず、司会者がマイクを持っていたのに少ないからと言ったし、説教は無いし、ミサ後にオルガンの許可をいただこうかと恐る恐る神父に尋ねたら、以前外からの人に壊されたことがあるので今回は遠慮してほしいと言われた。私はショックを隠せなかった。悲しかった。）

いままで海外のどこの国でも拒絶されたことは一度も無かった（快く鍵を渡して自由に弾かせてくれる国もある）。わたしが日本でオルガニストをしていると言っただけで。毎朝ミサにでるのでオルガニストや神父に顔馴染みができる。だから彼等と話すチャンスは多い。通りで偶然に

出会っても神父様から声をかけてくる。日本の神父はどうだろうか。朝ミサを司教様もやっている大聖堂もあるから驚く。日本でもあるのだろうか。

今回行ったフランスとドイツとハンガリーの教会ではほとんどの人が、聖変化の時にひざまずいていた。聖歌はスクリーン上に或いは壁にスライドで写しだされ(オルガニストが準備する)、誰でもと一緒に歌える。突然に教会に入っても一緒に参加できるヨーロッパの教会が私は好きだ。

一般信徒について。朝ミサに毎日顔を出す人は10人以上、50人位の教会もある。若者もいる。老弱男女がひとつに集まる数少ない場所のひとつが教会だと思う。ミサに与った後仕事に行くのは日本も外国も同じ。大体30分位で終わる。説教は短いがある。夜のミサは40分位で説教も少し長目。どの神父が担当しても説教はあった。昼間にミサをあげている都会の教会もある。説教をしない教会は無かった。

日曜日は三度以上ミサがある教会や大聖堂でも毎回信徒が教会から溢れ出てくるのを目撃している。ミサ後、売店もあるがみんな教会の中では静かだ。おしゃべりは外でしている。中で大きな声でしゃべる人はいない。日本では残念ながらいる。ミサの前は特に静かだ。どの神父もミサの前にはオルガンの許可を与えていない。静かに黙想するのを妨げる音は御法度だ。だからおしゃべりもない。日本の教会はどうだろうか。



以上、海外の教会と日本の教会の違いを並び立てることになってしまったが、誰にでも開かれているカトリック教会の良さを日本の神父、信徒がみずからの良さとしてだれをも気持ちよく迎え入れるだけの心のゆとりがほしい。カトリックの信者しか対象にしない行事の数々に追われてそれでよしとする教会が多いのではなかろうか。

或る教会では、外国人のために外国語の典礼パンフレット、ローマ字のふりがながついた典礼や聖歌を準備している教会もある、日本語がわからなくてもミサには参加できるが、日本人と一緒に唱えたり歌ったりするなかで「ひとつのからだなる教会」を実感できるのではないだろうか。

カトリックの典礼は世界共通だから困らない。どこに行ってもミサにあずかることができる。これは私達カトリック信者の大いなる恵みだと確信する。

(Mitsuko KAMIJO : 南山大学卒業生)

明治期におけるカトリック逐次刊行物の流れについて

岩間 潤子、 笹山 達成、 牧野 多完子

1. 明治初めのカトリック雑誌の発行状況とその時代背景

明治前半の日本ではカトリック関係の雑誌は、1881(明治14)年に東京浅草で発行された『公教萬報』と京都で発行された『聖教雑誌』が始まりのようであり、それ以前の記録は無い。その理由として、開国はされたがキリスト教は邪宗として禁止のままであった事が大きい。

明治期のカトリック伝道は、パリ外国宣教会からプチジャン神父(Petitjean, Bernard Thadée)が司教として長崎に赴任し、そこで隠れキリシタン達と出会った事から始まっているが、彼等の存在は時の政権にはかなり危険視され、かえって弾圧を受けてしまった。その事があって、プチジャン師の布教活動は非常に困難となった。浦上の隠れキリシタン達の流刑(記録によれば、慶応4年に始まる浦上四番崩れは浦上の信徒全員が流刑を受けるというもので、実に3,394名の信徒が20藩に移送され、その地で拘束され辛酸をなめた。1872~73(明治5~6)年に放免されて浦上に帰る事が出来た者は、2,911名であったとされる)を解くために、ローマ教皇へ実情を報告しにローマへ帰っている。他の諸外国の諸教会へ明治政府の宗教弾圧を訴えてもいる。

キリシタンを邪宗門とする宗教政策が、江戸時代からそのまま継承されてしまったのは、明治政府が天皇制を中心にした国家体制をとり神道を国家宗教にしようとしていたため、キリシタンを邪宗門とするのは自然であった。また、隠れキリシタン達の信念と団結を恐れたためとも思われる。キリシタン禁制の高札は、諸外国からの圧力によって1873(明治6)年にやっと撤去されたが、積極的に信仰の自由を認めただけではなく、キリスト教がもたらす西洋文化と技術の発展を望んだためだったので、いわば黙認にすぎなかったといえる。

プチジャン神父が長崎の隠れキリシタン達を導く事を布教活動の中心にしたのは、浦上の隠れキリシタン達の信仰が16世紀のローマからの布教によるものであり、信仰の中身は変わらずに維持している事に感動し、彼らを導く事が第一の使命と考えたからである。そのために、ローマ教皇の教義を伝え、正しい信仰に導く事に力をそそいだ。ド・ロ神父(De Rotz, Marc M.)に命じて、ひそかにキリシタン時代の写本、キリシタン用語による教理や祈りの本、典礼暦(教会暦)を印刷させたのは、浦上の信徒達のためであった。当時、パリからの資金援助は望めない状態にあったので、他地域への布教を手がける余力はなかったようである。

日本における本格的なカトリック伝道は、プチジャン神父が引退し、新任の司教による布教を待たねばならなかったといえる。ただし、むろんプチジャン以外の神父達もいたわけだから、布教活動がなかったわけではない。その方法として徒歩で各地を回り、教えを説き、そこで入信した信徒達のために伝道所を設け伝道士を家々に回らせて信者を守るという方法と、各地に華麗なるゴシック式天主堂を建築し、人寄せをし、そこを拠点にして伝道活動をするという方法があったのだが、当時は表向きにも一般信徒への伝道は、かなり困難をともなったと思われる。従って、この時代の信徒の核は隠れキリシタンからの改宗者を中心とする事になる。

1876(明治9)年に日本国内のカトリック教区が南北2つにわかれたが、南の教区の信徒数が多数であったのは彼等隠れキリシタンの存在が大きい。

プチジャン神父以降の布教活動は、それまでのフランスの司教団による布教が、ドイツ、スペインからも司教が派遣されるようになり、拡がりをみせた。その動きにより、カトリックの布教が長崎に偏りがちであったのが、ようやく人口密集地である東京での布教活動が本格化する事となった。

カトリック関係の教育施設が作られ、カトリック信者数が伸びてきた。それに併せて雑誌も多数出版されるようになった。ただ、次々と出版されてはいても、あまり長続きしないものが多く、いまでも残っているものは、『声』^{注*}のみである。長続きしなかった理由であるが、明治期の雑誌の執筆者が限定されていた事であろうか。まだ日本人で司教になっている人が少なく、知識人を相手にするだけの余裕も無かったと思われる。どの雑誌も最初は格調高く出版されるのだが、そのうち同じ論調になり、あきられてしまう事になる。予算的にも厳しい状況にあり、同じ人が違う名前で書いていたようだが、かなり無理がある。ただ、明治期中期からのカトリック関係係

誌の流れは、細い線ではあったが消える事が無かった。その中心となっていたのが、パリ外国宣教会所属のリギョール司祭(Ligneul, François Alfred Désiré)である。彼は『天主之番兵』の主幹として健筆を發揮し、『天主之番兵』が廃刊になると、『公教雑誌』(後に『公教学術雑誌』、『日本公教雑誌』に改題)にも執筆として活躍した。『日本公教雑誌』が廃刊になると、カトリック家庭誌『声』の編集長を引き受け、そこでまた健筆をふるっている。彼は教理や教会史だけではなく、カトリックの立場から欧米の新知識を紹介し、時事論評を掲載して当時の日本の国家主義へ警告を發したり、反キリスト教的欧米思想へ反論を加えたり、プロテスタント教会やロシア正教に対して神学論争をしかけたり、闘う司祭として日本のカトリックを育てた人として評価されている。

2. 明治14年以降の逐刊物の流れ：具体的資料

明治期に発行されていた雑誌について、具体的に内容と方針を紹介する事にしよう。

『公教萬報』：1881(明治14)年5月から1885(明治18)年4月まで、東京浅草茅町の本多善右衛門が本多宅で発行した。編集小池豊範。菊判10数ペ-ジ。月2回発行。ローマ通信、教会記事、聖教雜報、諸国各説の欄を設けて教会内信者への連絡と、報道を目的としていたが、しだいに講義・説教が中心となった。読み物としては、「日本教友伝」、「露徳の聖母行利生紀略」、その他諸聖人の小伝もあり、漢詩、和歌、俳句を余白に載せてもいた。96号以降は、交友社が引き継いで『天主之番兵』として発行された。

巻頭に、発行の方針が載っているのので、要約して下記に記載する。

日本の信者達が、世界のカトリック教会の状況を知る事を第一にする。どんな辺境野蛮な土地においても教えは広まっています、彼らの活躍のお話を聞く事はとても心楽しい事である。ことに、ローマ教皇は信徒にとって親なのだから、平生の動向と教えを残らず報道したいと思う。教義はたくさんの論述すべき事があり、単に朝夕の説教だけで理解する事は出来ない。ここでは、詳細に論じたい。

信者以外の人にはキリスト教の事を全く知らないのだから、信じて学ぼうとはしないのだが、真の道を目指そうとする人が出るように少しは論じるべきである。

異教徒からの入信者も少なくないので、彼らに対してもキリストを証し、ただここの教えのみが、まことのキリストの教会である事を証明する。

教義の事柄では無い記事も若い人達にとって有益な知識となるならば、天文・地理・哲学・植物学・農学等について西欧の各新聞より抜粋して分かり易く載せたい。又医学の分野の事柄も載せたい。

以上の5項目を柱として編集するとしているが、政治に関しては論じない事を表明もしている。理由として政治に熱中すると魂の救済を忘れてしまう。また官僚が信者の場合にキリスト教の信者である事が苦しくなるだろうからとしている。この辺りは当時のローマの方針にそっているとされる。

『天主之番兵』：『公教萬報』を引き継いで、東京の交友社から月刊で1885(明治18)年5月から1889(明治22)年6月まで発行された。巻号も前誌を引き継いでいて96号から144号まで発行された。発行兼編集は三島良忠。内容は報道と講義録。主幹のリギョール司祭を軸として、天主教要論、聖母要論、希露離教論、景教要論などの教理を体系的に説明したり、十字軍などの歴史をとりあげた。

三島良忠、広瀬源八、前田長太が共同で翻訳を担当した。また、ドルワール・ド・レゼー(Drouart de Lézey, Lucien)が天文学、生物学、地質学に関する欧米新知識を紹介したりした。

『天主之番兵』に改題した理由を最初の号に載せている。この名前は、フランス語の“Soldat de Dieu”から来ていて、その言葉どおりに、天の主の番兵として主を信じ自己を守り、信望愛の3つの徳を堅く守り、霊を救う仕事を担うという意味で使っている。

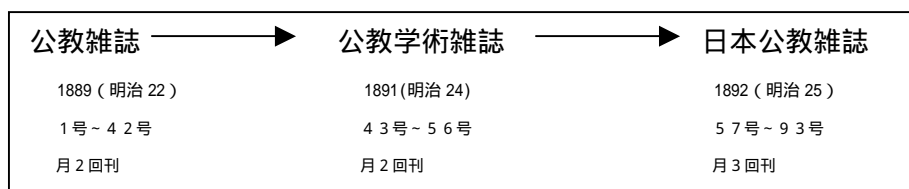
前誌の方針とは少し違ってきているようであり、カトリックの立場からの欧米の新知識の紹介や時事論評を掲載したり、反キリスト教的欧米思想への反論やロシア正教、プロテスタントに対

する神学論争を行ったり、かなり当時の知識人を意識していると思われる。

『聖教雑誌』：1881(明治14)年7月20日に京都府上京区の全能社から発行された。福井淳編集。月4回の発行を目指していたが、不定期で3号(同年9月)までしか発行されていない(東京大学図書館に所蔵がある)。ヴィリオン、A.(Villion, Amatus)による京都布教が始まった頃とされている以外に、この雑誌についての記録がない。ただ海老沢有道氏のみが『切支丹典籍叢考』のなかで、この雑誌の内容を紹介している。初号は46版、5号ルビ付き二段組12頁の構成。内容は、文明開化は聖教の結果、十字架、基リス督の略伝、天主教伝播の概略、有馬の致命人(有馬の街安の殉教)、日本帝国の光明(日本の聖人殉教)、浪花の悪法師、島原の今弁慶、稲荷おろしの奸策、等々で充実している。氏は、この雑誌を日本におけるキリシタン史文献の最初のものとして評価したが、実際に何年間か継続して発行されていたならば、そう言えたかもしれない。

『公教雑誌』：1889(明治22)年11月5日に創刊された布教ならびにカトリック的教養雑誌。編集は、パリ外国宣教会ドルワール・ド・レゼー司祭である。第1号の本紙発行の趣旨において、「未だ我加特利力教即ち公教を知らざる人をして其眞理を知らしめ既に之を知れる人をして益々明瞭にて更に進歩せしむる者とせり」とあり、加特利力教を詳細に記載するほか、一般社会の政事、経済、文学およびその他百科の学術についての論説、学説、史伝、批評など広範に扱うものであった。その執筆者は、主編集者のドルワール・ド・レゼーのほか、リギョール、テュルパン(Tulpin, Augustin Ernest)などパリ外国宣教会関係者である。本紙は、1891(明治24)年7月15日発行の42号をもって終わり、以後『公教学術雑誌』『日本公教雑誌』と改題されている。この変遷においてもこの雑誌の持つ主義は継承されている。誌名には宗教が標示されているが、国家時事の問題、社会日日の出来事、内外重要事件の是非得失など社会全般の出来事について国民的議論を掲げ、自由に評論している。

『公教雑誌』と『公教学術雑誌』の刊行頻度は、ともに月2回であり、『日本公教雑誌』は、月3回であった。構想には毎週発行、日刊新聞とする事が考えられていたが、それは叶わなかった。



『声』：カトリック逐次刊行物の代表的存在である『聲』は、1891(明治24)年加古義一氏を主筆に京都の木鐸社より発行された。その目的は、教会内各信者の連絡、報道の機関としての役割を果たす事であった。特に地方の通信を扱い、1911(明治44)年には、ボンヌ東京大司教(Bonne, François)の命により東京、長崎、大阪、函館の四教区公認の機関誌となった。『聲』は、創刊8年後の1899(明治32)年、その発行所を東京・三才社に移した。その時、中心的役割を果たしたのがパリ外国宣教会司祭のルモアヌ師(Lemoine, Clément)であった。師は、私財を投じて三才社を創り、後述の『天地人』『教の園』を創刊し、自ら社説、時評、科学、文芸などを執筆した。『聲』は、その後、三才社の財政上の行き詰まりによる閉鎖に伴い、ステイシェン師(Steichen, Michael A.)が創立した教友社にその発行を移したが、1929(昭和4)年、カトリック中央出版部の創設とともにその委員に加わったルモアヌ師が再び編集主幹となった。

『天地人』：カトリックの一般総合雑誌として1898(明治31)年1月に三才社から刊行された。創刊に携わったのは前述のルモアヌ師とパリ外国宣教会のペリ(Péri, Noël)であった。ルモアヌ師が携わった逐次刊行物においては、前述の『聲』とこの『天地人』が双壁である。『聲』は純

粹な宗教雑誌、『天地人』は、一般総合雑誌とその性質は異なっている。『天地人』において、ルモアヌ師は、表面的には現われず、その当時の代表的な人物を執筆者として集め、総合的文化雑誌を作り上げた。しかしこの当時、世俗雑誌が多く排出され、これらとの競争により3年6ヶ月で廃刊となった。

『通俗宗教談』：1903(明治36)年6月から1906(明治39)年2月までに40号が発行された。出版者は、当時、東京市京橋区築地の國光社内にあった通俗宗教談発行所となっている。主宰は、東京教区最初の日本人司祭であり、前述の『天主之番兵』や『公教雑誌』で訳稿を寄せるなど、中心人物として活躍した前田長太師である。明治初年にカトリック布教が開始されてから、出版事業は有力な布教の手段であり、定期刊行物の発行は不可欠と言えたが、1章の発行状況とその時代背景のところでも、少し触れたように、毎号所定のページ数を確保するのが容易なほど、著述者が豊富であるわけはなかった。当然のごとく、出版者もまた同一の複数の人物が関わる事となる。本誌1号に掲載された発刊の趣意のなかに「浅学非才の^{むたぐし}不肖、今此の^{かほ}欠陥を補い、^{もとめ}要求に応ぜんが為に、無き智慧を絞り、無き財布を傾けて、本誌『通俗宗教談』なる貧児を産み出しました。実に難産と謂わざるを得ません」とあるが、文中の「不肖」というのは、まさに前田長太師本人である。師に限らず、当時のカトリックの布教活動は、個人の私財、特に宣教師の出資に拠るところが大きかったようである。また、「此の^{かほ}欠陥」というのは、教学を通俗に説き、平易な言葉で記す、婦人子供にも解り易いような雑誌の不在を意味する。雑誌の発行を子の出産に喩えるところも、この雑誌発行の趣旨に沿うよう創意工夫が感じられ興味深い。ただし、まったくの婦人子供向けというのではなく、伝道師には演説説教の助けとなるよう、信者へは黙想觀念の供になるような親しみ易い雑誌を目指したとの記述もある。

『新理想』：1905(明治38)年8月に創刊され1907(明治40)年4月21号をもって廃刊された。公教青年会の事業として、「『新理想』は崇高なる理想を憧憬し、堅実なる主義を把持し、厳正なる宗教を信望し、健全なる哲理を扶植し、精確なる史学を奨励し、純潔なる海外文学を移植し、有名なる泰西偉人を紹介し、斬新なる科学上の発明を報道す」事を旨として刊行された。発刊の辞では「物質と共に、而も物質以上に精神あり」として唯物主義を引き合いに精神主義こそが新理想であると謳っている。また、このほかに、外国語の普及を図る目的で、号末に、仏英独和对訳文を掲載した。公教青年会は暁星中学出身者有志の発起により創立された信心会で、高校や大学で学ぶ学生への伝道活動などを行ったが、将来を担う若者への布教に相応しい、純粹で力強い息吹を感じる雑誌と言える。しかし、カトリック布教が開始されてからおよそ40年後の事であり、新しい日本の建設を志す進取的な青年への布教としては、寧ろ遅すぎたと言えるかもしれない。この雑誌もまた前田長太師の編集である。中心となる執筆者は7名、うちリギョール司祭以外はすべて漢字名で記されているが、リギョール司祭を含む5名がパリ外国宣教会の宣教師である。前田長太師自身もここでは前田越嶺と名乗っており、当時の布教者たちの尽力のほどが窺える。

『道のわらべ・少年教話』：1905(明治38)年7月に創刊され1906(明治39)年6月に2号2巻をもって廃刊後、『道の童・家庭教話』として継続。東京、公教志向団(社)より出版された。『カトリック大辞典』に拠れば、『道の童・家庭教話』は1907(明治40)年8月より1908(明治41)年5月で終刊とされるが、『日本キリスト教歴史大事典』では、1911(明治44)年12月まで続け、以降は三才社刊行『教の園』に引き継がれたとされる。当初は月刊で、後に不定期で発行されたため、終刊の時期は定かでないのかとも推測されるが、『教の園』は1909(明治42)年1月に第1号が発行されている事から、公教志向団(社)としての出版活動は行っていたが、『道の童』に関しては1908(明治41)年5月刊行の2巻5号が、実質的に最終号と判断されるであろう。少年教話版は、その名の通り児童雑誌である。ほとんどすべての漢字に読み仮名が振られ、おはなしや行儀や公教要理についてなど面白く、為になるような内容が、語り掛けるような文体で綴られている。カトリック伝道士として働き、特に子供の教理教育や信仰生活の世話を担当してい

たとされる、石川音次郎氏が公教志向団(社)を立ち上げ、中心となって編集を行なった。

「『道の童』発刊に就いて」を前田霊父が寄稿しているが、これも前田長太師と考えられる。一年の休息期間ののち、少年少女の教育の基本は家庭にあるとの理由から家庭向けとして、家庭教話版が新たに刊行された。この時には無代価での配布は「斯ては教育上却って宜しからず」との判断で代価を附している。教育上との名目であると同時に財政的に困窮していたであろう事は想像に難くない。しかし、そのような状況にあっても次々に出版活動を行うところに、信仰と布教への厚い思い、また何よりも人々を救いたいという真摯な情熱を感じるのである。

『関口教会月報』： 1907(明治 40)年 10 月に第 1 号が発行され、1912(大正 7)年 1 月の 124 号をもって廃刊。この年、関口教会に赴任する事となったドルワール・ド・レゼーが中心となり、その翻訳のほとんどを林寿太郎が行った。レゼーは、前任地の甲府では農業が中心であり、住民が入れ替わる事もなく、信者すべて顔見知りであったので、自然と一教会は一家庭のようになったが、東京のこの教会(関口教会)では、信者になって初めて出会う人が多く、その職業も様々であるため、互いに疎遠になりがちである、と述べている。また、それを繋ぐ方法として、毎月、教会内の出来事のみを掲載した冊子を作り、教会付属の信者に限って配布する事とした。この発行の経緯は『声』にも通じるところがある。掲載する内容は概ね、聖会月曆、当月日曜ミサに読む福音、教会の報告、月曆に関する信心的事項、教会の状況、布教費、聖書の抄訳、郵便箱、家庭の為、広告であった。郵便箱というのは、公教について知らない事などを口頭あるいは書面で申し込むと、回答してくれるというもので、質問箱とか投書のようなものである。読者を教会内の信者に限っているため、ともに雑誌を作っていくとまでは言えないだろうが、一方的に発信するというばかりでなく、読者との相互のやりとりがあり、教会内の空気を親しみ易くし、信者との、あるいは信者同士の関わりを親密にしようとする姿勢が見て取れる。

『教の園』： 先の『道の童』を継承して、1909(明治 42)年 1 月から 1924(大正 13)年 12 月までに、月刊で 16 年間発行された児童向雑誌である。東京の三才社から発行されたが、三才社の閉鎖に伴い、『声』と同様、1912(明治 45)年に教友社に移管された。創刊号の冒頭に「本誌発行の趣意」とし、分かり易い言葉で聖書の場面を語っている。前述の関口教会月報の 17 号(明治 42.2)に、この『教の園』発行のお知らせがあるので抜粋する。「是は本年 1 月信者なる幼年のために出来た雑誌です。1 箇月 1 回三才社から発行します。幼年諸君はえを読めば面白くて楽しみながら教理が覚えられます。」『教の園』は、1924(大正 13)年に、『声』に吸収され廃刊となった。

『公道』： 『カトリック大辞典』によれば、1911(明治 44)年 10 月より、月刊で、松江市母衣町の天主教教会内の青年公道会により発行されている。今回の調査では文献など探す事ができなかったが、松江教会などに当時の資料が残っていれば、何か手掛かりが得られるかもしれない。慶長以後 250 年間の迫害の時期を越えて、パリ外国宣教会士によって、再び山陰地方に布教が始められたのは、1880(明治 13)年の事である。その後、1897(明治 30)年になって、ようやく松江に福音が伝えられた。その後の 14 年間でこの地方の信者を増やし、このような雑誌が発行されるまでになったと考えられるだろうか。

注*：『声』は連綿 112 年に渡って発行されてきたが、2002 年 12 月号の発行をもって休刊とすることが 8 月号誌上で発表されている。

<参考文献>

- 五野井隆史著『日本キリスト教史』(吉川弘文館、1990)
- 鈴木稔著『一般人のための日本カトリック教史』(中央出版社、1993)
- 『日本キリスト教歴史大事典』(教文館、1988)
- 青山玄著「幕末明治カトリック布教の性格」(上智大学『カトリック研究』35号 1979年6月 p.57-72)
- 『キリスト教人名辞典』(日本基督教団出版局、1986)

上智大学編『カトリック大辞典 ほか』（富山房、1954）
 増田良二著「明治・大正カトリック著述家筆名考」（『望楼』第4巻3号 1949年3月 p.23-32）
 増田良二著「ルモアヌ師と明治カトリック文学」（『声』788号 1941年10月 p.37-44）
 内山善一著「ルモアヌ師と雑誌の刊行」（『声』788号 1941年10月 p.34-36）

(Junko IWAMA, Tatsunari SASAYAMA, Takako MAKINO : 学術情報センター)

* 明治期におけるカトリック逐次刊行物の流れについてまとめてきたが、これ以降、大正および昭和期については、次号にて掲載予定である。

資料寄贈者(前号以降~2002.10)

「カトリック文庫」充実のため、下記の方々より貴重な資料を寄贈していただきました。
 ここにお名前を掲載させていただき、改めて謝意を表したいと存じます。

[個人]

青山玄氏

[団体]

聖母の騎士修道女会修練院(長崎県北高来郡)、カトリック東山教会(名古屋市千種区)

<<カトリック関係資料 寄贈のお願い>>

本学図書館では、わが国におけるカトリックの歴史・文化・活動を知るために、関係資料の散逸、毀損を防ぎ、かつ広く研究者などへの利用を図ることを目的とし、「カトリック文庫」を1993年より設置し、下記の資料を収集しております。

- * 教会刊行物(教会史誌・教会報、その他)
- * 明治、大正、昭和初期のキリスト教関係出版物
(聖書・祈祷書・聖歌集・要理書 およびそれらの解説書、雑誌・新聞・布教資料、その他)
- * 修道会史・教会史 および関係刊行物・資料
- * 日本への布教に関する外国側資料

つきましては皆様方から資料の寄贈を賜りたく、ここにお願ひ申し上げます。

なお、資料は選書の上、本学図書館の蔵書として所蔵させていただくこととなりますので、ご了承ください。

南山大学図書館カトリック文庫通信

カトリコス第17号 2002.11.1 発行

南山大学図書館「カトリック文庫」委員会

編集委員: 牧野多完子、岩間潤子、今井和子、笹山達成

〒466-8673 名古屋市昭和区山里町18

ホームページ: <http://www.nanzan-u.ac.jp/TOSHOKAN/dyuna/midashi.htm>

E-mail: library-n@nanzan-u.ac.jp TEL:052-832-3707 FAX:052-833-6986 担当者: 笹山

NANZAN
UNIVERSITY

